「明海日本語」第12号（2007.3）

台湾人日本語学習者の作文における文構造の特徴

── 日本語母語話者との比較を通して ──

李　　宗禾

キーワード：複文，文節，従属節，意見文，修飾の度合い

はじめに

日本語学習者の作文における文の特徴とはどのようなものであるか，それはしばしば日本語母語話者の文章と比較され，明らかにされたものである。いままでの研究では，大きく質的な調査及び量的な調査に分けられる。質的な調査では，語彙，文法，表現など各研究者により様々な視点から研究が行われてきたが，量的な調査では，文の長さを示す目安として，文節数がよく挙げられている。本稿では，質的な調査を中心に，益岡・田窪（1992）で提示されている「従属節」といった視点から台湾人日本語学習者及び日本語母語話者の文章における文構造の性質の違いを考察し，それぞれの特徴を明らかにしたい。

1. 調査対象

台湾人日本語学習者（以下は「学習者」とする）の文章は明海大学の短期留学生（35名）の作文を使用した。この全ての学習者は，台湾の大学で日本語を専攻するものであり，学習歴は平均3.5年で，日本語レベルは中上級に当たる。

日本語母語話者（以下は「母語話者」とする）の文章は朝日新聞の「声」という投書欄から抽出したものである。学習者の文章数に合わせるため，2006年1月から3月までの内容を35篇抽出した。「声」を選んだ理由は，一つには，投書した人たちは，年齢も職業もそれぞれ違い，偏りのない一般性が求められるためである。もう一つには，文章の長さが500字前後に制限され，それは学習者の作文の量とそれほど差がないためである。

2. 文の内部構造についての考察

2.1 従属節について

ここで言う「従属節」の「節」とは，「文節」の概念と違い，益岡・田窪（1992：4）によると，「複文を構成するところの，述語を中心とした各まとまり」ということである。また同書（1992：181）では，「従属節はさらに，述語の補足語として働く『補足節』，述語の修飾語（または，主節全体に対する修飾語）として働く『副詞節』，名詞を修飾する働きを持つ『連体節』に分かれる。」と述べている。本稿では，日中両方の文章における「従属節」を取り上げ，益岡・田窪の分類を参考に，「補足節」，「副詞節」，「連体節」といった項立てを用いて分析した。なお，考察する際に，学習者の作文の中の従属節の産出数に焦点を絞り，誤用を取り扱わないようにした。

2.2 考察結果及び分析

表1に示すとおり，学習者の間では，「補足節」と「副詞節」の使用率が母語話者を上回っているが，「連体節」の使用率が低い傾向が見られた。以下に，「補足節」，「副詞節」，「連体節」の順を追って分析してみよう。

表1 従属節の使用数

（ ）内は%

	補足節	副詞節	連体節	合 計
学 習 者（35名）	200（48）	80（19）	135（33）	415（100）
母語話者（35名）	110（32）	35（10）	204（58）	349（100）

2.2.1 補足節

益岡・田窪（1992：182）は「従属節の中で述語を補う働きをするもの」を「補足節」と呼ぶ。「補足節」をさらに，「形式名詞『こと』，『の』，『ところ』」（以下「形式名詞」とする），「疑問表現の補足節」，「引用節」に分類している。以下に，学習者と母語話者が使用する「補足節」の内訳を提示する（表2）。

補足節の使用数の順位を見ると，両者とも「形式名詞」，「引用節」，「疑問表現」という順になっている。その中で特に目をひくのは学習者が「形式名詞」の「こと」を多用することである。ここでさらに形式名詞の「こと」の使用実態を探っていくと，次の結果が分かった。

両者とも「体言化」の割合が高いが，その中で，学習者は特に「こと＋助詞＋形容詞・形容動詞」を多く使用していることが分かった。「慣用的表現」では，学習者が母語話者より使用率が高く，「ことができる」という文型が一番多かった。次のような例がある。

例1　例えば，私は日本語学科の学生だが，日本語を三年間も勉強しても，日本に一年間住んだ

表2　補足節の使用数

（　）内は%

補足節の使用数	形式名詞	疑問表現	引用節
学習者　200（100）	156（78）	15（7.5）	29（14.5）
	こと　131		と思う　26
	の　20		と言う　2
	ところ　5		と信じる　1
			と知る　0
母語話者　110（100）	75（68）	10（9）	25（23）
	こと　51		と思う　17
	の　23		と言う　6
	ところ　1		と信じる　0
			と知る　2

表3　形式名詞「こと」の使用実態

（　）内は%

	学習者 131（100）	母語話者 51（100）
体言化	99（76）	43（84）
こと＋助詞＋形容詞・形容動詞	60	2
こと＋助詞＋動詞	14	18
こと＋だと思う	4	1
その他	21	22
慣用的表現	32（24）	8（16）
ことができる	17	5
ことがある	8	3
たことがある	4	0
ことになる	2	0
ことがない	1	0

ことがある外国人のように日本語をうまく使うことができません。（c 115）

例2　外国人にとって，よく理解することができません。（c 401）

例3　日本人と話すとき，べらべら日本語を話すことはできます。（c 412）

例4　その感じはやっぱり英語がいくら勉強しても自分の実力はほとんど前へ進むことができませんでした。（c 413）

学習者は，可能を表す動詞の活用形の使用を回避し，間違いにならないような文型を意識して使うことがこの結果につながるのではないかと考えられる。また，今回の調査では母語話者が使っていない「慣用的表現」が，学習者の作文で使われた例がいくつかあった。それも学習者が文章を書

く際に，常に文型を意識して書くことと関連性があると推定される。

「疑問表現」および「引用節」の使用頻度に関しては，両者の間では大差がないが，学習者は「疑問表現」の使用が不得手なところが非常に目立った。以下では用例にあたって見ていきたい。

例5　実，私は自分の国にどんな節句や習慣などがあるのがよく分からない。(c 102)

例6　授業中によく日本の慣用表現は中国語でどう言うと聞かれている。(c 103)

例7　最初の時に日本語はどんな使い方があまりわかりませんでした。(c 408)

例8　私も困りますけど，先生に聞いて，本を読んで，地元の人はどう使うことを気づきますと，大丈夫だと思います。(c 411)

この4例とも疑問を表す「どう」「どんな」と呼応する助詞「か」が抜けているという誤用である。これは中国語からの干渉が原因の一つになっているのではないかと推測できる。中国語においては，疑問詞があればそれ一つだけで疑問文が成り立つ。そこに文末の疑問助詞「嗎」，「呢」を加えると，かえって非文になってしまう。学習者の作文に助詞「か」が抜けているのは，文を作る際に，こうした中国語の語法をそのまま日本語に訳したからだと考えられる。このような誤用は15例の中で12例もあり，文中の疑問表現の習得ができていないと考えられる。また，文中の疑問表現を回避するような傾向がみられ，その代わりにいくつかの疑問文で表現したものが8例ある。

例9　一体日本人ではなかったら正しい日本語を話したり，書いたりすることが無理ですか。それとも人によって違うのか。これは外国語を勉強している私に対して一つ面白い問題だと思う。(c 107)

例10　いつか新しい言葉を作ったか。誰も知りません。(c 415)

例11　それはどうしてですか。台湾の日本語の先生も言い出せませんから，多分違う国の習慣だと思います。(c 417)

このように，疑問表現をいくつかの疑問文で表すことによって誤用を避けることができるが，全体的にはやや会話的な口調になり，文章表現にある独特な緊張感が失われてしまうように感じられる。

2.2.2　副詞節

「副詞節」の基本的性格については，益岡他（1992：188）によると「述語の修飾をしたり，文全体を修飾したりする働きを持つ」とのことである。表4は副詞節の使用数の内訳である。

学習者は「時を表す」副詞節を多く使用し，全体の半分以上を占める。この「時を表す」副詞節の中で，「とき」が母語話者より頻繁に使われることと，学習者の使っているバリエーションが母語話者より多いことが一つの特徴と言えよう。

表4　副詞節の使用数

（　）内は%

副詞節の使用数	時を表す	目　的	様　態	原因理由	その他
学習者　80（100）	49（61）	8（10）	0（0）	2（3）	21（26）
	とき　45 すえ　0 以来　1 うち　1 途中　1 たびに　1	ため　8		おかげ　2	
母語話者　35（100）	10（29）	5（14）	8（23）	2（6）	10（28）
	とき　8 すえ　2 以来　0 うち　0 途中　0 たびに　0	ため　5	ように　8	ため　2	

次に，学習者の文章には現れていない「様態を表す」副詞節について見てみたい。ここで言う「様態を表す」副詞節というのは「ある動作の特定のやり方を述べるのに使われる」というような用法であり，益岡・田窪（1992：195）によると「私がするようにやってみてください」という例文の中の「ように」を伴う節である。今回の調査では学習者の作文には「状況変化」を表す「ように」は5例[1]あるが，「ある動作の特定のやり方を述べる」の用法は見られなかった。それに対して，母語話者の作文には8例あり，以下にその例を挙げる。

例12　スポーツクラブらしい施設に着くと，プールの天井をはがした建材を集めるよう指示された。（J 15）

例13　だが，それと同時に，考えの基本は「障害の有無や年齢にかかわらず，誰にも優しい街」であることを広め，誤解をなくすように努力しなければならないと思う。（J 24）

名柄（1987）によると，「よう・ように・ような」には，「比況」，「例示」，「説明」，「推測」，「婉曲」，「目的」，「勧告・願望」，「慣用的表現」など8種類の用法があることが示されている。また，「慣用的表現」には「意図」，「状況による決定」，「命令・忠告」3種類の用法がある。今回の調査で学習者は「状況による決定」という用法に偏っているように思われる。偏っている原因については更なる考察をする必要があるが，学習者は「様態を表す」用法が使えないことや，「様態を表す」の使用が思いつかなかったなど，ということが原因と推定される。

2.2.3　連体節

「連体節」はいわゆる「連体修飾」である。今回の調査では，母語話者の文章で，「従属節」にお

表5　連体節の使用数

（　）内は%

連体節の使用数	補足語修飾節	相対名詞修飾節	内容節	その他
学習者　135（100）	95（70）	9（7）	31（23）	0（0）
		前　3 後　6 前日　0	という　28 感じ　3	
母語話者　204（100）	162（79）	5（3）	33（16）	4（2）
		前　2 後　2 前日　1	という　33 感じ　0	

表6　連体節における修飾部の強弱

	1*	2	3	4	5	6	7	8	9	10
学習者	39	6	6	9	11	6	11	2	1	1
母語話者	0	11	14	29	25	18	12	13	9	1
	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20以上
学習者	3									
母語話者	6	8	4	2	2	2	0	2	0	4

* ここでは修飾部の強弱を数値で表すことを試みた。1とは，形態素を一つ用いて名詞部を修飾することを意味する。

ける「連体節」を多用する傾向が見られた。ここでは「補足語修飾節」，「相対名詞修飾節」，「内容節」，「その他」と4つのタイプに下位分類した。集計結果は表5のようになる。

「補足語修飾節」が「連体節」に占める割合から見れば，学習者と母語話者の間で大差はないが，内部構造には食い違いが見られた。ここで言う内部構造の食い違いとは，名詞を修飾する強さの程度の違いを指す。同じ名詞修飾部といっても，その中には修飾度の強弱がさまざまである。例えば「違う国の文化」（c 104）と「語学留学をさせたりできる家庭」（J 11）とは，動詞一つを使って名詞を修飾する一種の概念的なものを表すものと，まとまった文の形で名詞を修飾するものとは，その複雑さの違いが感じられる。そこで，今回の調査で集計してきた例の修飾部を「日本語テキストの形態素解析」[2] というプログラムにかけ，処理を行ってみた。「形態素解析」の結果によって，学習者と母語話者の連体節における修飾部の強弱を比較した。結果は表6の通りである。

学習者の中で形態素を一つ使用して名詞部を修飾するような傾向が見られ，「違う習慣」，「使う言語」「習う可能性」など動詞一つを用いて名詞を修飾する例が殆どである。また，形態素を二つ使用する例は動詞の過去形やサ行変格動詞であり，両方合わせてみれば全部で45例である。それに対して，母語話者ではこのようなものは僅か11例しかない。母語話者は形態素を四つ使用する例が一番多く，例えば「新年を迎えた私」，「超が二つ付く氷河期」などがある。もう一つの特徴は，母語話者は学習者より多数の形態素によって表された連体修飾節が多いことである。例えば「オリ

ンピックにでることを目標に努力をしてきた選手」(J 22),「児童養護施設を出たものの戻る家のない子どもたち」(J 23),「教団の影響下にないとは言い切れない生徒」(J 27) などの例がある。以上の結果から学習者の文は修飾部の表現の度合いが弱い，単なる概念を表す表現が中心になっていることが分かった。一方，母語話者は主述関係を持った文らしい表現で名詞部を修飾することが多く，修飾の度合いが強いと言える。このことから，学習者より母語話者のほうが文はやや複雑な構造で構築されていると考えられる。

泉子・K・メイナード (2005：397) では,「修飾節が名詞の前に置かれるという語順を利用して，聞き手に対してスムーズに情報伝達を行うために使われることがある」と述べている。今回の調査で得られた結果はまさにその通りである。日本語母語話者の文章では，連体節を多用すること，そして，多くの情報を持つ文によって修飾部を構成すること，という二点が特徴と見られる。その二点の特徴は母語話者にとって馴染みの深い表現ではないかと考えられる。言語の運用面という点から見ると，学習者が母語話者と同様に，自然な日本語の表現を産出できるように，連体修飾の指導を重点的に行う必要があると言えよう。

3. ま と め

今回は，学習者と母語話者の作文における「従属節」の構成要素の分析を通して，両者の文章における文構造の性質の違いを考察することにより，それぞれの特徴を少し明らかにした。調査結果を以下の要点にまとめられる。

① 学習者は「補足節」を多用し，母語話者は「連体節」を多用する傾向があった。

② 学習者は埋め込み文としての「疑問表現」が使えない。無理に使うと誤用が頻繁に出た。その原因は,「補足節」ですでに分析したように，中国語の干渉であると考えられる。

③ 学習者の作文では，副詞節における「様態を表す」の用法が見られなかった。それは使えないのか，それとも様態の使用が思いつかなかったのかについては，さらに追究する必要がある。

④ 「連体節」においては，学習者の文の修飾の度合いは小であり，構造も単純であった。一方，母語話者の方は修飾の度合いが大で，そのため，構造が複雑であった。

なお，母語話者の方は，例えば「そのためにこそ，被告人に反論の機会を十分に保障した手続きを踏んだ裁判を進める重要性を強調したい」のように，長くて，修飾の度合いが大きいだけでなく，重層構造を持つ修飾部を使う例がよく見られた。これに関しても，今後の研究課題として取り組んでいく。

〈注〉

(1)「分かるようになった」が2例,「理解できるように」が1例,「なれるようになりました」が1例,「ことわざは似たように見えますが」が1例。

(2) 杉浦研究室 http://sugiura5.gsid.nagoya-u.ac.jp/program/dochasen.html

参考文献

浅井美恵子（2002）「日本語作文における文の構造の分析 ── 日本語母語話者と中国語母語の上級日本語学習者の作文比較 ──」『日本語教育』115号　日本語教育学会 pp. 25-37

安藤貞雄（1987）『英語の論理・日本語の論理』大修館書店

一ノ坪俊一（2003）『相手に伝わる日本語を書く技術』日本経済新聞社

小宮千鶴子（1993）「読者層を異にする文章間に見られる文構造の相違 ── 述語数による日本史教科書の段階比較 ──」『中央学院大学教養論叢』第6巻第2号 pp. 137-165

泉子・K・メイナード（2005）『談話表現ハンドブック』くろしお出版

田代ひとみ（1995）「中上級日本語学習者の文章表現の問題点 ── 不自然さ・わかりにくさの原因をさぐる ──」『日本語教育』85号　日本語教育学会 pp. 51-60

寺村秀夫（1998）「名詞修飾部の比較」『寺村秀夫論文集II ── 言語学・日本語教育編』くろしお出版 pp. 139-184

名柄迪他（1987）『外国人のための日本語例文・問題シリーズ2 形式名詞』荒竹出版

古郡廷治（1999）『文章添削トレーニング ── 八つの原則』筑摩書房

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 ── 改訂版 ──』くろしお出版

南不二男（1986）『現代日本語の構造』大修館